

# 旋風

泡坂妻夫



# 旋風

江苏工业学院图书馆  
藏书

集英社



旋風

せん

ぶう

一九九二年五月二五日 第一刷発行

著者 泡坂妻夫

あわさかつまお

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇  
郵便番号 一〇一 一五〇

編集部 (〇三) 三二三〇 六一〇〇

電話 販売部 (〇三) 三二三〇 六三九三

制作課 (〇三) 三二三〇 一六〇八〇

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、本社制作課宛てにお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1992 TSUMAO AWASAKA

Printed in Japan ISBN4-08-772847-1 C0093

旋

風



いつ意識が戻りはじめたのか判らない。

あたりの風景を認識するようになってからどのくらい時間が過ぎて行ったのかも知らない。何時間も同じ場所にしゃがみ込んでいたようでもあるし、十分ぐらいだったような気もする。長い暗闇を通り抜けてきたのは確かだった。感覚がはつきりしはじめたときすでに忘却がはじまって、忘却の白い霧はつい傍まで迫っている。生まれ落ちた赤ん坊と変わらぬ。

実際、哲は臍の緒を切られたばかりの赤ん坊のように真っ裸で血塗れだった。赤ん坊と違うのは母親と祝福してくれる人が傍にいないことだ。

判っているのはごく僅かだ。木立の間に夏の青空が見える。空は眩しすぎて長くは見ていられない。哲がいるのはクマザサの上だった。しかも四十五度もありそうな急な斜面だ。それだけで驚いてはいられない。背後は切り立った絶壁が迫っている。巨大な斧で削ぎ取られたような岩肌は、見上げるとこちらへ倒れかかってきそうだ。前方はしばらく斜面が続くがその先はよく判らない。多分、背後と同じような崖が谷底まで落ち込んでいると思っただけで間違いなさそうだった。

哲は背後の崖のてっぺんから、衣服をすっかり剥ぎ取られて、谷底に突き落とされたのだ。そのままだったらハイウエイの事故車みたいな姿になっていて当然だった。死を免れたのは落下していく途

中、木の太枝にバウンドし墜落の速度がいくぶん緩められたからだと思う。哲の頭上にずんぐりした木が岩を割って枝を伸ばしていた。何という木か判らないが、こんもりと葉が茂り、小さいがしぶとい小兵力士のように見える。その木が幸いして、哲はクマザサの茂みに軟着陸した。といて、勿論、無傷でいられるわけではない。全身に創痕、とりわけて左上腿の部分の痛みが激しかった。過去の経験からすると骨折は免れているらしいが、肌は広い部分で紫色に変色している。喉の周りもひどい状態らしい。喉の方は別の種類の痛みだった。これも経験で判る。知らぬ間に首を絞められたのだ。だが、自分を絞殺して谷底に突き落とそうとした相手は誰か、見当もつかないし、考えてみたくもなかった。前のことを思い出そうとすると気分が悪くなる。脳が崩れてしまったように考えを纏めることができなくなっていた。気分も最低で、ときどき吐き気が起きる。これからどうしようという気力もない。そうした体調の不満を言わなければ、あたりの自然は悪くはなかった。多少、風は強いが寒くはない。むしろ全身の痛みを和らげてくれる感じだ。空気が澄み、小鳥がしきりにさえずっている。自動車の音も工事の音もない。

しばらくすると、鳥の声の中に水のせせらぎが混っているのを耳が聞き分けた。哲はただ水が欲しいという気持だけで、木の幹にすがって立ち上がった。

左足を庇えば歩行が不可能なほどではなかった。だが、全く無防備な姿だったし、もう一人の自分を背負っているような感じで、ここで足でも滑らせたらせっかく拾った命が元も子もなくなる。一步が死に直面しているのだと自分に言い聞かせなければならぬ。

予想したとおり、斜面の先はクマザサが急になくなり険しく崖が落ち込んでいる。崖を避けながら岩伝いに谷間へ降りるのはかなり難事業だった。一歩ずつ、水の音が近付くことだけが励みだった。

眼下に細い溪流が見えたとき、これでどうやら死だけは回避できそうだと思った。

流れは深いところでも、膝下までしかない。両足を水に浸すと鋭い冷たさが脳天まで突き上がった。哲は頭を振り、両手で水を掬って口に運んでみる。その刺戟で胃が痙攣を起こしたらしい。多少の胃液を戻した。再び口をすすぐともう大丈夫だった。水の旨味も判る。哲は水を飲むのに専念し、次に全身の汚れを丁寧<sup>ていねい</sup>に落としはじめた。

顔を洗っていると、ふと、甘味のある匂いに気付いた。花とも香料ともいえる匂いだ。あたりを見廻すと、竹の葉に似た草が生えている。小さなリンドウの群生だった。まだ花を付けてはいないが、哲は匂いのことを忘れ、リンドウを抜くと水洗いして根を噛んだ。爽やかな苦味が口に拡がっていく。どうにか人間らしい気持になり、考えをまとめようとしたが、まだその意志に思考は追いつかない。しばらくして、珠月院大路<sup>しゅげついんだいち</sup>が経営する「ホテル チャンプ」でパーティが開かれた記憶だけはどうか呼び起こせた。早稲田、外苑東通りにあるそのホテルに集まった人達——となると急に脈絡が一貫しなくなる。何人かの顔が浮かび上がったが、どれも哲をあざわらうような表情になって消えていった。その中の一人が自分を亡き者にしようとしたのだ。自分に殺意を抱く者の存在だけが、今、明白だ。

ここで苟立っても無駄だと思ひ、焦燥を静めようとする、本能的な憤怒が頭を持ち上げてきた。それも、誰にぶつけていいか判らない口惜しさだ。

哲は再び水を頭に掛け、復讐はこの五体で行う、と決心した。警察も裁判も頼らない。自分の加害者をこの目で確認し、この身体で倒すのだ。今、何一つ持っていないが、切札はある。それは、自分が生きているという事実だ。



自分を断崖から谷底に葬った加害者は、それで目的は達成したと思っっているはずだ。その人物だけが織口哲は死んだと誤認している。それを手掛かりにその相手を突き止めるしかない。

しばらく水の流れを見ていると、目は無意識に生物の存在を捜しているのが判った。文字通り、身に一物もない状態になって、生存の本能が目覚ましたらしい。流れの中に魚影らしいものは見えなかったが、小さな虫類はいくらでもいた。

近くの草むらで生物の気配を感じたとき、哲の手は落ちていた小枝を拾っていた。子供のころの感覚を思い出したのだ。選んだ枝は先の部分が工合良く二股に分れていた。

哲は素早く枝の先を草に突き刺した。狙いは狂わなかった。蛇は瞬間に尾を振り立て、枝からみ付いてきた。かなりの力強さだったが、哲は蛇の頭を押しえ付けたまま、片手で細長い草を抜き取り、茎を使って蛇を枝に縛り付けた。

哲の身体に生物の動きが伝わってくる。哲は自分も生きていることをはじめて痛感した。哲は深く息を吸い、胸に手を当てた。そして、蛇を巻き付けた枝を片手にして歩き出した。

沢に降り立ってから、時間にして一時間ばかり。裸足と左足の痛みを気遣いながらの岩伝いだから、距離にすればほんのわずかだろう。哲は左側の山腹に紫色の細い煙が立ち昇っているのを見付けた。何かは判らないが人がいそうな気配が判る。哲はその煙を目標にすることにした。そこに辿り着くにも、確実に三十分以上はかかった。

少し開けた台地で、丸木小屋の屋根が見えた。近付いて様子を窺うと、屋根の下には土で盛り上げられた二つの窯が並んでいる。煙はその一つの傾いた煙突から吐き出されているのだ。

その傍で、半袖の丸首シャツを着た男が軍手で木の枝を挽ひいていた。半分白髪の坊主刈りで顔は陽焼けして褐色だった。哲はその五十前後の男が一人で働いているのを確かめてから声を掛けた。

「今日は。いい天気ですね」

穏やかに言ったつもりだったが、案の定、男は哲の姿を見ると、目をばちばちさせた。

「なんとも、簡単な身み形なりだね」

哲は笑顔で言った。

「都会じゃこうしたのをゼンブレスって言うんです」

「ここいらじゃ、そういうのを痴漢という」

「痴漢なら男の前には立ちませんよ」

男は顔中を皺しわにして笑った。相手に悪意はないと見たようだった。

哲は木の枝に縛り付けた蛇を差し出した。

「これ、買ってくれませんか」

「なんだ。蛇屋か」

「そうじゃないんですけど、今、僕が売れるのはこれしかないんです」

男は哲が手にしている蛇をじっと見た。

「物騒なものを持って来た。ヤマカガシではねえか」

「そうです」

「こ奴こいつに毒があるのを知ってるか」

「ええ。でも、大して大きくないですから」

「……どこで捕った」

「もう少し上流でです」

「どこから来ただ」

「九州です」

「九州から、その形で？」

「途中までは普通でした」

「そりゃ、そうだ。いや、下らねえことを訊いた」

哲は苦笑いした。

「どうやら、好きでそんな恰好になったんじゃないやねえようだな」

「好きでも度胸がないと、ね」

「とって、ここに山賊が出たという話は最近聞かねえ」

「崖から落ちたらしいんです」

「どこの崖だ」

「判りません。もう少し上流の崖です」

「あの辺で人が落ちて助かるような崖はねえはずだが」

「そうなんですか」

「……しかし、いい身体をしている。何かやっているのかね」

「柔術を。少しだけ」

「それで判った。落ちたとき、受け身になっていたんだ。偉えもんだ」

男はしきりに感心した。哲は意識のないまま崖から落とされたとは言いたくなかった。

「とすると、きつと悪いものを食べたんだな。この辺にはワライタケが生える」

「……シメジなら取って食べました」

「それがワライタケだったんだな。あれを食うとやたら陽気になるから、羽根が生えた気で崖から飛んだんだ」

「……そうかも知れない」

「いや、そんなときでも、只で人の助けを受けようとしねえ気持が偉え。よし、その蛇を買ってやるべ。と言っても、今、俺は一銭も持っていねえ」

「とりあえず、人間らしい形にさせて下さい」

「よし、判った」

男は傍に置いてあった布袋の紐を解き、中からアルミの弁当箱を取り出した。弁当箱は空の音がした。哲の手から蛇を受け取ると、男は空になった袋の中に押し込んで紐を結び直した。慣れた手付きだった。

「さて、何があったか」

男は立って窯の後ろの方に行き、すぐ手提げ鞆と手拭とビニール製のサンダルを持って来た。

「あんまり綺麗じゃねえが、ないよりはましだべ」

哲は手拭を受け取って腰に巻き、磨り減ったサンダルを突っ掛けた。

男は手提げ鞆の中から小さな容器を取り出した。丸い蓋を開けると軟膏のようなものが入っていた。それを指ですくい、傷口に塗り込みはじめる。

「ゴマの匂いがしますね」

「うん。キハダの皮を粉にしてゴマ油で練ったものだ。ダラニスケと言う。俺が作った薬だ」

「効きそうですね」

「ああ、よく効く。キハダは煎じれば胃にもいい」

薬は熱を取るようで快く、身体も軽くなる感じがした。容器はほとんど空になった。男は家に来れば捻挫と打撲傷によく効く湿布薬がある、と言った。暫は改めて礼を言い、名前を言った。

「俺は一寸木誠吾という。炭焼きをしていたところだ」

「これが炭焼きの窯なんですね」

「見たことがねえか」

「ええ。はじめてです」

「今、火の入っている窯はあと二、三日して窯口を閉めて蒸し焼きにする。その間、こっちの窯に薪を入れておく。毎日来るわけじゃねえ」

「……僕は運が良かったんですね」

「ああ。悪い後は良い。それが昔からの決まりだ」

「人家まで遠いんですね」

「なに、わけはねえが、余所者<sup>よそもの</sup>にや道が判るまい。昔の道に迷い込んだら先がなくなっている。一休みしたら荷物を取りに行くか」

「……なんの荷物ですか」

「頭でも打ったべか。お前の荷物だよ。まさかその姿でここへ来たわけじゃあるめえ」

「いいんです。碌なものはないし、服だって崖から捨ててしまっているでしょう」

「これから、どうする」

「必要なものは働いて買います」

「若え者は、いいなあ」

誠吾は笑った。哲も本当にそうなら、どんなに楽しいだろうと思った。

「織口君と言ったな。煙草を喫うか」

「ええ。あるんですか」

「ああ、ある」

誠吾は鞆の中から皮のケースを取り出して二本の煙草を抜いた。両切りのよれよれの煙草だった。

「これも手製なんですか」

「そう。葉や煙草や酒は買ったことがねえ」

哲は一本を渡され、マツチで火をつけてもらった。かなり辛口だったが、いい風味が残った。

「食べ物より元気が出そうです」

「そりゃよかった。喫わねえ奴はすぐ食い気を起こすから嫌いだ」

「五分前には五分後に煙草が喫えるとは思いませんでした」

「そうさ。先のこと判ってしまったえば生きている張り合いもねえ」

「実は……ここがどこか判らないんです」

「ワライタケを食うからそうなる。自分の居所は知っておいた方がいい。ここは山梨の端っこで、納戸

と戸というところだ。この下を流れる川が文目川」

納戸というのは全く知らない地名だった。哲はこれまで山梨に来たこともないし、知人もいない。「観光客が来るところですか」

「いや、近くの観光地じゃ来るが、ここまで足を伸ばす茶人はいねえね。見た通り変哲もねえ山の中だ。以前は別だったか」

「……元は観光地だったんですか」

「いや、違う。俺のところへやって来た。香具師の仲間で納戸の誠吾さんと言や、ちよつと名が通っていたもんだ」

「……………」

「山雀を捕えて芸を仕込むのが好きでね。それを香具師が買いに来たんだ」

「山雀……どんな芸をするんですか」

「見たことはねえか」

「……ありません」

「見物人が金を払うと香具師は鳥籠の戸を開ける。山雀はお宮の扉を開けて、中からおみくじを引いてくわえて戻って来るという芸さ。山雀は人なつこくて伶俐だから、まだいろいろな芸をする」

「……大変な芸ですね」

「そうとも。教えるのも大変だ。好きだからいいようなもんだが、儲ける気ではできねえ仕事だ」

「今でも教えているんですか」

「ああ。買手がいねえでも山雀は可愛いからな。最後のお客は……昨年だったか、学生を連れて大学の先生だった。バードウォッチングだという。山雀に芸を教える骨を聞かせてやったが、それきり客

は来ねえ」

「人間も難しい芸は流行らなくなっているみたいですよ」

「その方がいいのかも知らん。山雀も芸を覚えて人に使われるのは大変だろう。山雀が売れなくなるどふしぎなもので、炭焼きの注文が多くなった。グルメ本物嗜好とやらで、世の中はくるくると変わるわ」

誠吾は短くなった煙草を地面に捨てて足で揉み消した。

「僕、なにか手伝いましょう」

「うん。いい心掛けだ。だが、その身体じゃ無理だ。それに、仕事はもうお仕舞いさ」

「もう終りなんですか」

「ああ。夏も終りだし、ここは日が落ちるのが早い。うっかりすると家へ着く前に真っ暗になってしまふ。よかつたら俺の家に泊まっていけ」

片付けは哲の服装のように簡単だった。誠吾は鋸を小屋の中に放り込むと、鞆を提げて歩きだした。山路を誠吾の後につきながら、哲は訊いた。

「今日は何日でしょう」

「なんだ。日も忘れたか。もつとも、俺も日は気にしねえ方だが、今日だけは知っている。昨日がお盆だったから、今日は八月十六日だ」

すると、気を失っていたのは一夜だけだったのだ。一夜だけでも、殺されていた一夜は屈辱そのものかと思えた。哲を裸にしたのは万一死体が発見されたとき、警察でその身元を確認されぬための用心だ。とすると、哲の身元が割れば犯人は容疑を受け易い人間、哲と深い関係にある人間だということ



とを意味している。頭はだいぶはつきりしてきたが、それ以上になるとまだ雲をつかむようだった。

山道を歩いていると、故郷へ帰って来たような感じがした。

東京へ出て来てから、まだ一週間経ったばかりだが、鹿児島で暮らしていた二十年近い間の出来事と人との出会いがあった。その一つ一つが今度の事件と結び付いているに違いない。

東京には哲が姿を現わしてはならない確固とした人間のつながりが出来上がっていたのだ。たとえば、それは鎖編みのようなもので、他のものの入り込む隙がない。もし無理に入り込むとすると、その部分が毀れ、破壊は全体に及んでしまはずだ。ある者がそれに気付き、哲が鎖を破壊することをどうしても有せなかつたのだ。

鹿児島で八星流柔術の道場を持つ加治木祐作は東京にそんな強固な意志が潜んでいようとは夢にも思わなかつた。だから、自分の古い先の短いことを知った加治木は哲を呼び寄せ、

「東京へ行って、八星流柔術を復興させよ」と、命じた。

今、八星流柔術を継いでいるのは珠月院泰久という男しかない。泰久は加治木と同年配で、加治木とは莫逆の友だった。その男の片腕となり、八星流を昔の繁栄に復興させなければ俺は死ぬに死ねない。珠月院道場には、泰久に柔術の実力を見込まれて婿入りした大路という男もいる。それに哲が加われば、昔の繁栄を取り戻すことは可能だ。

父親を早く亡くしてしまつた哲にとって、加治木は恩師と父親を兼ねた存在だった。その加治木の命令には従うしかなかったのだ。

加治木がそれまでその話を持ち出さなかつたのは、哲の母親に遠慮があつたからだ。母親の恒子は